



南山大学人類学博物館 MUSEUM notes

- ・展示中の土偶・岩偶
- ・人類学博物館の

火踊り仮面コレクション

VOL.9 2023.4

展示中の土偶・岩偶

主に縄文時代に作られた、人の形を模した土製品を土偶、石製品を岩偶と呼びます。人類学博物館では、日本各地から出土した土偶・岩偶を収蔵しています。

当館の考古資料(特に縄文時代資料)の多くは、一九四六年に千葉県市川市に設立された日本考古学研究所(後に考古学研究所に改名)から一九五八年に移管されたもので、研究所が発掘・調査を行った関東周辺の資料や、当時研究所に寄贈された九州、中国地方、東北などの資料が中心となります。

所蔵する土偶の中で特に有名なものが、茨城県北相馬郡の花輪台貝塚で出土した、花輪台のヴィーナスとも呼ばれる土偶です(写真一)。一九四六一九四八年に日本考古学研



写真一 茨城県花輪台貝塚出土土偶

(高さ 4.9cm、最大幅 3.2cm、最大厚み 1.4cm)

究所によって調査され、縄文早期の遺物と竪穴住居跡が検出されました。花輪台貝塚は当時、日本最古の貝塚として知られていて、この土偶も日本最古のものとして注目されました。調査成果は『日本考古学』の創刊号に掲載され、「花輪台式土器」の標式遺跡となつていきます。現在は更に古い土偶が三重県や滋賀県で確認されたことにより日本最古ではなくなりましたが、最古級の土偶として教科書や書籍に掲載されています。自立



写真二 千葉県余山貝塚出土土偶

(残存部の高さ 8.9cm、最大幅 8.1cm、最大厚み 4.2cm)

つた欠損のない小さな土偶で、現在は資料保護のためレプリカを展示しています。
写真二の土偶は「北相馬郡立木」と注記されていたため、茨城県北相馬郡の立木貝塚で出土した土偶とされてきました。しかし、研究者からの指摘があり、千葉県銚子市の余山貝塚で出土したという記録(大野 一九〇七)が残っていたことから、現在は余山貝塚出土としています。後頭部に穴のあいた山形の形の頭部を持ち、乳房の表現のある土偶です。

土偶は、女性を模しているもの、破損した状態のものが出土することが多いです。そのため、安産祈願の呪具や、身代わりとして意図的に打ち壊すためのものであったのではないかと考えられています。他にも、食糧確保の成功への祈願のために作られた、堆積した土の重みで破損したという説もあり、何のために作られ、使われたのかについては研究の余地があります。

愛知県西尾市の清水遺跡から出土した土偶は、腰部の前面と背面に線刻画があるのが特徴です(写真二)。遺構からの出土ではないため、正確な時期は不明とされていますが、弥生時代前期の可能性があると言及されています(植木 二〇一六:二二五)。みなさんには何が描かれているように見えますか？



写真三 愛知県清水遺跡出土土偶

(高さ 8.4cm、最大幅 5.2cm、最大厚み 2.5cm)



写真四 青森県三戸郡小向表採岩偶

(残存部の高さ 18.8cm、最大幅 24.8cm、最大厚み 4.9cm)

岩偶は縄文時代の前期と晩期に発達しました。晩期の岩偶は東北北部に分布し、基本的に軟質の石材で製作したもので、遮光器土偶と多くの共通点を持っています。この岩偶は青森県三戸郡南部町小向で表採され、日本考古学研究所に寄贈されました(写真四)。残っているのは上半身で、左腕部分が破損しています。岩偶も土偶と同じ目的で作成されたと考えられています。

土偶や岩偶は、展示室内の引き出しの中で展示しています(写真五)。今回紹介していない土偶も含め、全て手に取って観察することができます。職員が引き出しの亚克力板を外すので、博物館事務室にお声がけください。

(人類学博物館

元学芸員 秦 優莉香)



写真五 引き出し展示の様子

【参考文献】

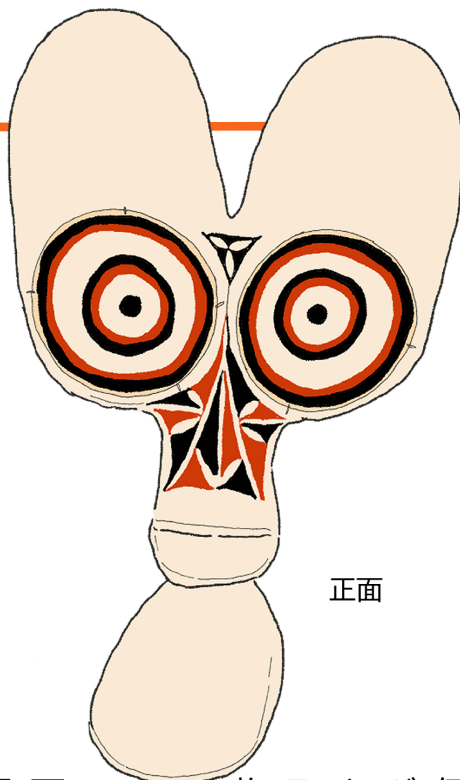
植木雅博 二〇一六「土偶に描かれた線刻画―愛知県西尾市清水遺跡の事例から―」『南山大学人類学博物館紀要』三二四―三四四 南山大学人類学博物館。

大塚初重・戸沢充則編 一九九六『最新日本考古学用語辞典』七〇、二四一 柏書房株式会社。

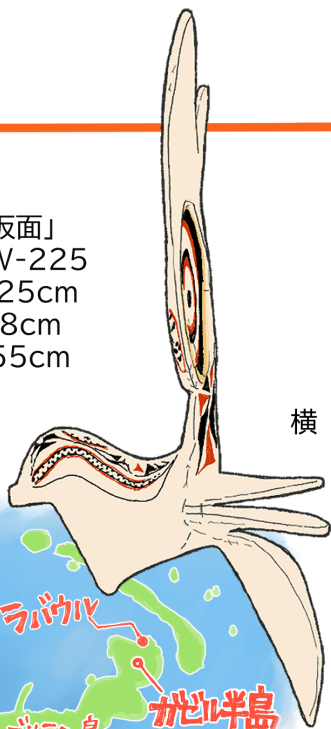
大野雲外 一九〇七「下総国海上郡余山貝塚発見土偶」『東京人類學會雜誌』二二(二五九) 東京人類學會。

吉岡卓真 二〇一五「余山貝塚出土土偶群の構成」『共同研究成果報告書九(高島多米治と下郷)』レクシオンについて 余山貝塚編)』七九―八二 大阪歴史博物館。

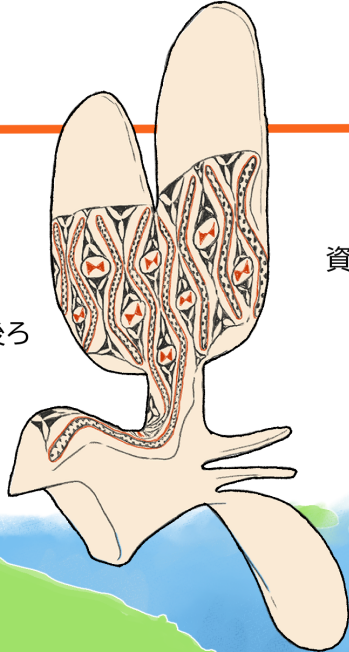
吉田泰幸 二〇〇二「花輪台貝塚土偶をみる」『南山大学人類学博物館紀要』二八―二九、四一 南山大学人類学博物館。



正面



横



後ろ

「火踊り仮面」
資料番号 IV-225
縦 125cm
幅 78cm
奥行 55cm



パプアニューギニア略地図(筆者作成)

大きな眼がひときわ目を引くこの仮面は、パプアニューギニアの東ニューブリテン州ガゼル半島に暮らすバイニング族が使用する仮面です。この仮面は、ファイアーダンスという、焚火の中に飛び込んで激しい踊りをする際に着用されるため、火踊り仮面と呼ばれています。ファイアーダンスは若者の勇気や力強さを示す通過儀礼や、作物の豊作を祈願する儀礼に行われます。パプアニューギニアのラバウルでは毎年七月に「マスク・フェスティバル」が開催されています。ここでファイアーダンスをはじめとする国内の仮面文化を持つ民族の舞踏を見ることが出来ます。異なる文化や言語を持つ国内の民族が集い、独自の文化をアピールする場として一九九五年に開始されました。

この独特な様相をしている仮面の造形は「ヒクイドリ」という鳥の頭部を象徴しています。ヒクイドリは、強い脚力と鋭い爪を持つっており、世界で一番危険な鳥としてギネスブックに登録されています。構造は、細く割った竹の枠気に、タパが張られています。タパとは樹皮布のことで、樹皮の内側の皮を木槌でうすく叩きのばして作られています。触り心地は、ガサガサとした紙のような質感です。内部は新聞紙で裏打ちして補強されています。軽い素材でできているので、大きさの割にあまり重量は感じません。



喉の赤い肉垂が火を食べているように見えることから和名で火喰鳥と呼ばれている。

世界-危険な鳥
ヒクイドリ

人類学博物館では火踊り仮面を展示室に三点と収蔵庫に十点、全部で十三点所蔵しています。当館で所蔵している火踊り仮面は、二〇〇九年に当館に寄贈された今泉コレクションのひとつです。コレクションの受け入れや資料の内訳については人類学博物館紀要第二九号を参照してください。本項では、当館が所蔵する火踊り仮面十三点に筆者のスケッチとコメントを添えてご紹介します。収蔵庫で収蔵している仮面は表に出る機会が少ないので、個性あふれる仮面たちをぜひご覧ください。

(人類学博物館

元学芸員 井原 瑠梨)

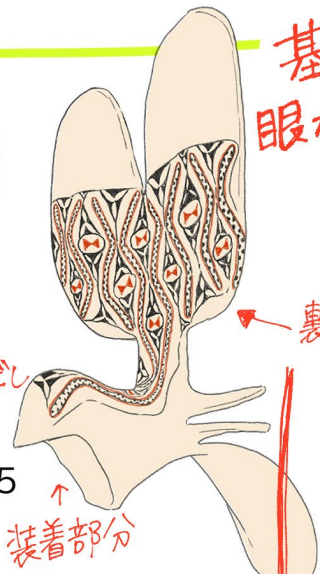
基本型
眼が二股

眼。→
内側から
黒→赤→黒の
順で塗り込め
ている。全てに
共通。



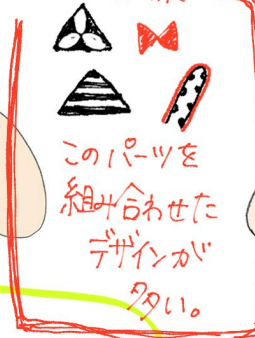
IV-225

↑
ヒコイドリの
肉垂を象徴している

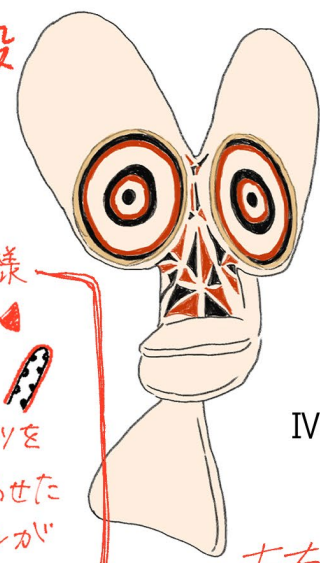


↑
装着部分

裏側の模様

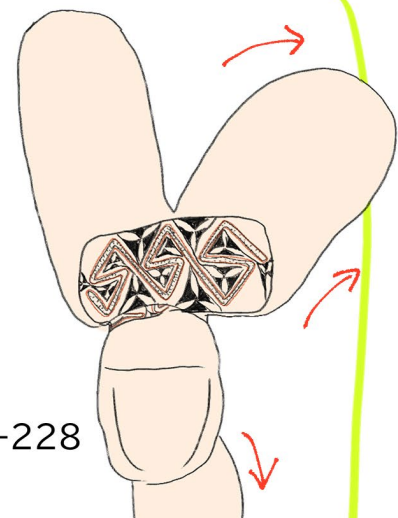


このパーツを
組み合わせた
デザインが
多い。

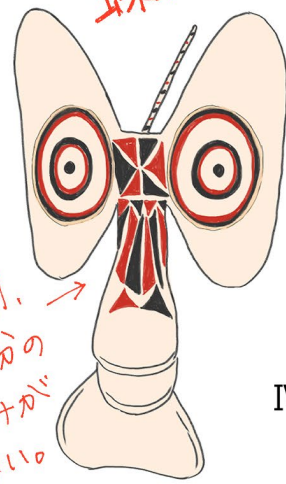


IV-228

左右非対称さん。
全体にゆがんでいる。



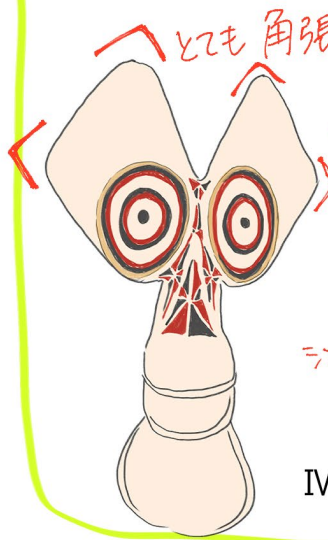
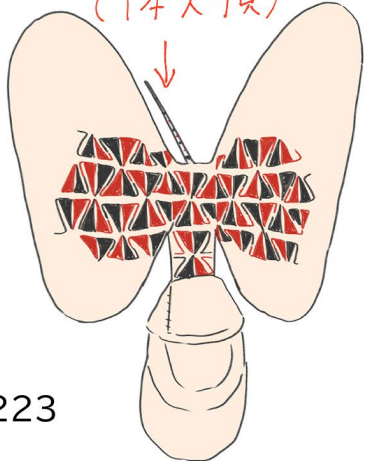
ちよと変り種。
蝶々タイプ



IV-223

眼の間、
鼻の部分の
描き込みが
多い

触角がある！
(1本欠損)



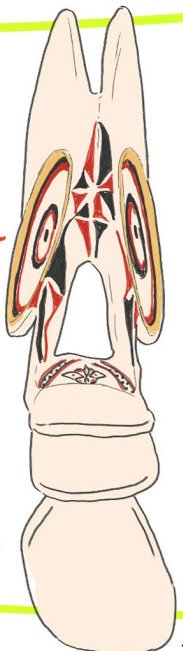
IV-659

↑
とても角張っているタイプ

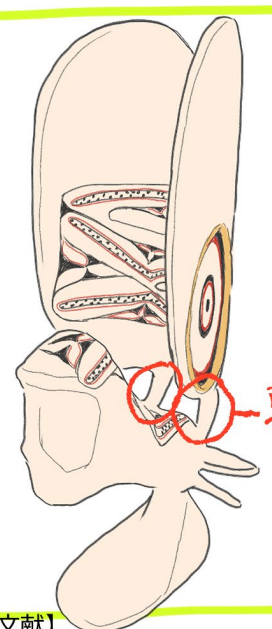
↑
シンプルな
図柄



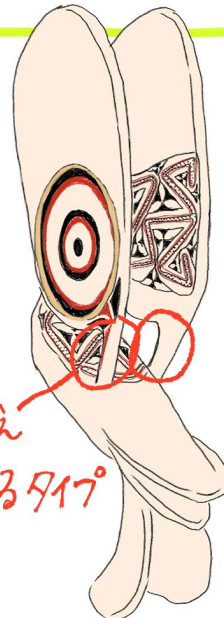
折いたまわて
いるタイプ



IV-658



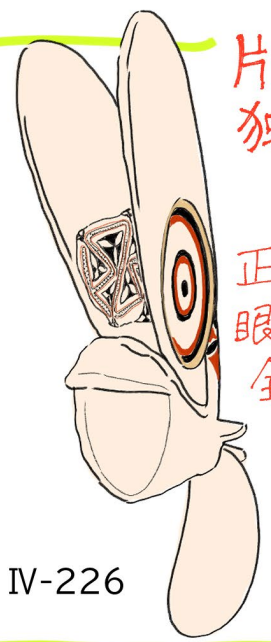
↑
軸で支え
られているタイプ



IV-226

片眼が
独立している
タイプ

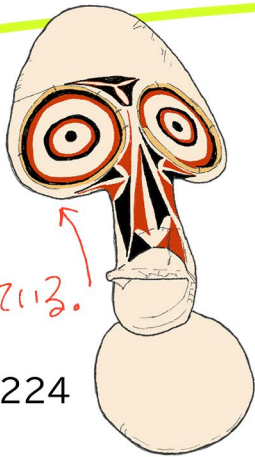
正面から見ると
眼の部分が
全く見えない。



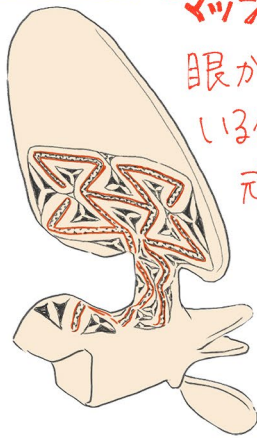
【参考文献】
TABIPPO、仮面部族が大集合するパプアニューギニアの奇祭「マスクフェスティバル」が予想以上に面白い！、<https://tabippo.net/papuanewguinea-maskfestival/> (参照2023-04-23)

マッシュルーム型

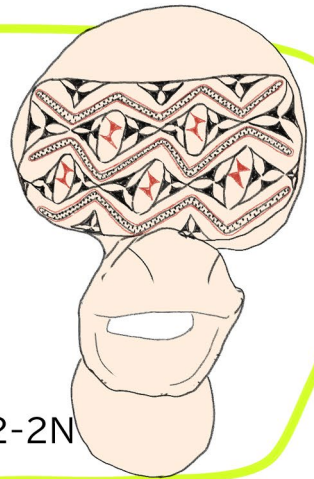
眼が二股や独立しているタイプと比較して頑丈な作りをしている。



IV-224



IV-802-2N

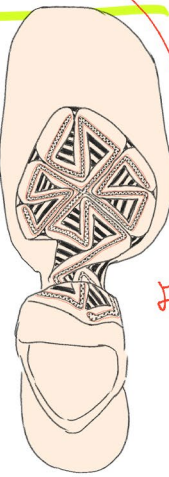


細長いタイプ

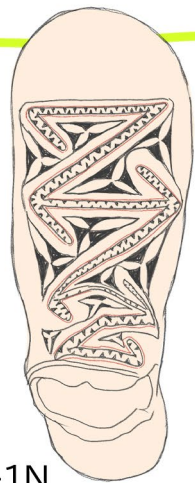
眼の上部のデザインが他の形状のものより複雑。



IV-805-2N



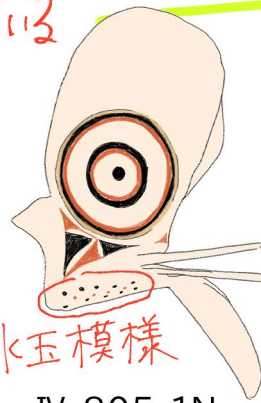
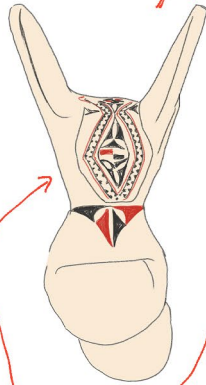
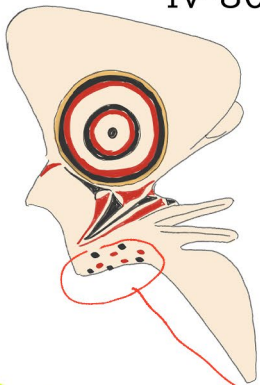
IV-802-1N



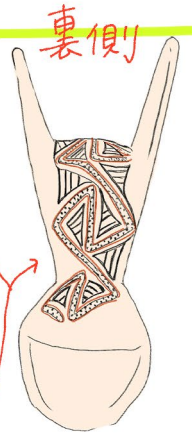
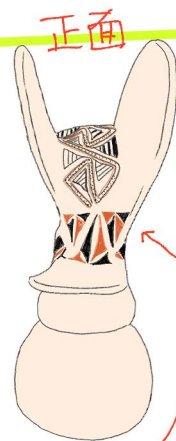
眼が真横を向いているタイプ

水玉模様

IV-802-3N



IV-805-1N



正面

裏側

眼の裏側ではなく中央部分に星柄が描かれている。



IV-227

豪快なV字型



正面